

## 避難先も 避難ルートも 住民主体で考える!!

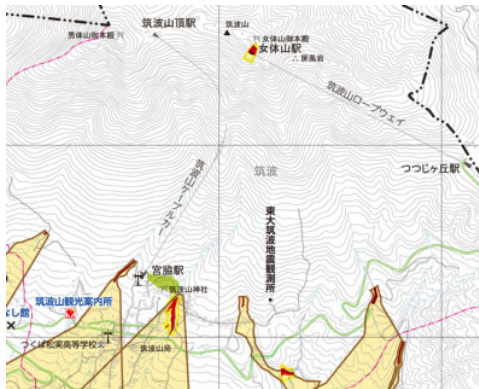
筑波山中腹に位置しており、筑波山観光の拠点となっている筑波地区は、ハイキングや四季折々の行楽の訪問客が多く、ゴルフ場や温泉街などの施設があります。筑波山神社の参道沿いに民家の建ち並ぶ「共存・共栄」のまちです。



### 筑波地区の特徴は？

鈴木さん：つくば市の人口は約 25 万人。そのなかで筑波地区は人口約 500 人であり、市域の北部にあります。

大久保さん：筑波山神社沿いに 250 軒ほどの昔からの民家があります。中高年層が 3 割、65 歳以上が 7 割を占めています。近年では他の地区への人口流出が増えています。



つくば市ハザードマップより 筑波山南麓にあるのが筑波地区

### 地区防災計画を策定したきっかけは？

大久保さん：昭和 13 年に筑波山神社の裏手を流れる「千手川」という、普段は本当に水量の少ない川が、豪雨の影響で溢れたことがありました。あふれ出した水は平地と呼ばれる他の地区まで流れ出て当時 3 名の方が亡くなられたと伝承されています。当時の住民の方はもうおられませんが、聞き伝わっています。今でも、その災害の跡地を見ることができるため、大雨が降ったら大変だということはみなさんの認識のなかにあると思います。

ただこれ以降には、地震や大雨でも怖い思いはしたことがあるものの、命は助かってきたので、高齢の方が多いこともあり、どのように防災活動を進めていよいか、がそもそもの課題でした。

鈴木さん：筑波地区が平成 24 年に土砂災害警戒区域の指定を受けたことをきっかけに、住民の方へ説明会を開いたんです。その時に防災に取り組んでは、と提案しました。

大久保さん：3.11 の際には筑波山への登山道で落石があって観光客の方が圧死されました。私の家の石垣も、すぐ近くの筑波山神社の石垣なども崩れて被害に遭いました。それから大雨の時には沢から水があふれて、けっこう頻繁に冠水する道路もあり、防災意識も少し高まっていたいました。

鈴木さん：それで平成 27 年度の内閣府地区防災計画策定モデル地区へ参画させて頂くことになりました。翌 28 年度に地区防災計画を策定したということで、市の方でこれを受け、地域防災計画の改訂に併せて 30 年に他の地区と同時に記載をしました。



いずれも平成 29 年度つくば市土砂災害防災訓練

### 策定プロセスは？

大久保さん：自治会が中心になってワークショップに取り組みました。住民のみなさんに集ってもらい、まずはそれぞれがリスクに感じて

いることを話し合う。そのリスクについて自分たちで「できることはないか」と協議することを続けました。

鈴木さん：はじめはなかなか住民の皆さんの間の防災意識に格差があり、難しいところもありました。ワークショップに参加し続けているうちに、徐々に「市民の方向士での意識の共有」が進んでいったように思います。

### アドバイザーの先生との関わりは？

大久保さん：アドバイザーの大矢根先生には、ワークショップの進め方と言いますが、みなさんの意見をどうやって上手く引き出して、検討していくのかの方法を教えてくださいました。

### 計画策定において工夫した点は？

大久保さん：筑波地区は災害発生時には市指定の避難所まで遠いことと、途中で川をまたがなくてはいけない箇所があり、そして高齢者も多いため発災時に移動すること自体が困難で、無理に指定避難所に向かおうとすれば二次災害に見舞われる危険性があります。そこで地区の中で比較的安全な場所はどこかとみんなで検討した結果、地区の中にあるホテルなら建物も頑丈だし、地区ごとに川を渡らずにそれぞれ最寄りのところへ一時避難できそうだということで、ホテルと自治会が協定を結ぶことで、一時避難所としてホテル側が住民を受け入れられるようにしました。

鈴木さん：この一時避難所としてのホテルは、自治会と宿泊施設さんとの間で交わされた協定に基づいており、市の指定避難所ではありません。でもこうして地域のみなさんと、事業者さんが一緒に災害時に避難して頂くことで市としても、どこに住民の方が何人避難されておられるかの把握、安否の確認にも繋がると考えています。

### 行政の自治会や住民への支援は？

鈴木さん：大雨の災害時に、窓を閉め切っていることや、暴風の影響で防災行政無線が聞き取りにくいという声が聞かれました。

大久保さん：何か音は聞こえるけれども、言葉までが聞き取れない。それならサイレンだけでも鳴らしてもらえばいいと。何か聞こえたらすぐに避難するようにしたわけです。

鈴木さん：市の防災行政無線では、現在、言葉での放送と同時にサイレンも併用するようになりました。また、これは他の地域では実施されていないと思いますが、地域住民のみなさんの判断で、自主的にサイレンを鳴らしてもらえよう無線のカギをお渡しています。

あとはモデル地区の指定を受けて、防災関係機関との調整や、策定にあたっての文書化などの細かなお手伝いをさせて頂きました。

### 計画の意義、効果は？

大久保さん：令和元年の台風 19 号の際に避難勧告が初めて発令された時には、住民それぞれが計画に沿って冷静に対応できたことも効果の一つだったかもしれません。連絡網を使って、避難準備・高齢者等避難開始の発令があった時点から、市の指定避難所までお年寄りが早めに避難出ていましたし、その他の住民のみなさんも、計画にあるように、それぞれが地域の状況を理解して、協定先の 2 か所のホテルに避難できたことはよかったですと思います。地域のみなさんの防災に対する意識が上がったように思います。

### 計画作成後の活動は？

大久保さん：自主防災会ができました。これはワークショップをやっていく中で、結成したほうが良いということでもできたものです。この自主防災会が自治会と一緒に避難訓練や避難所の開設・運営訓練、防災資機材の取り扱い訓練、避難ルートや避難場所、避難所等の確認などの取り組みをどんどん実施しています。策定した地区防災計画は全戸に配布しています。

鈴木さん：今回モデル地区になった地区防災計画の策定を参考にして、近隣地区の計画策定が進みました。平成 27 年度のモデル地区指定された筑波山麓地区の全 10 地区での策定が完了しましたので、平成 31 年のつくば市地域防災計画の改訂と同時に位置づけました。こういった意味では、他の地区の方々の波及効果も少なからずあったと思います。

### 今後の課題は？

大久保さん：流出した住民が多くなっているで、やはり若い世代の人たちのチカラが薄れてきています。それから、コロナ禍ということもあって、なかなか防災について集まりを開くこともできないので住民のみなさんの防災意識自体が薄れてきているのも気になっています。あとは観光のお客さんについては、観光協会や組合さんにも防災への取り組みへの働きかけは続けていきたいと思っています。



左が鈴木さん、右が大久保さん

取材協力：つくば市市長公室危機管理課 鈴木誉幸さん  
つくば市筑波地区区長 大久保正男さん  
取材日：2022 年 3 月 24 日